

目的 洋服と和服は着装する場合、異なった過程をたどる。即ち、洋服は着用する体型に合うように立体的に形づくり、その物に人体をはめこむような順序で着装する。それに対して和服は布地を何枚か平面的につなぎ合わせて一定の形を作り、着装する時に体に合わせながら、ダーツ・タック・ギャザーなど各個所に依じて、体型に合うように形づけて着装する。しかし、着装の方法は着用する人によって様様であり、そのシルエットも異なる。どの個所にどのような状態で、布を重ね、ひだをよせればよいかを知ることは、和服着装を容易にし、又美しく整った着装をすることができると考えられる。そこで本研究では、標準的な着装をした時の布の重ねる個所、面積の変化、ならびにその分量、厚さなどについて検討を試みた。

方法 和服の最も基本とされている大裁女物ひとえ長着を綿100%のゆかた地を用いて普通寸法で仕立て、試料とした。被験者は年齢21~23才の女子で身長、背丈はほぼ同じで、周径の異なる3名をえらんだ。着装法は一般的な着つけで着用させた後、接着テープ法により固定し、ひだ、ギャザーの個所、量の変化を測定した。又その時に生ずる布の重ね枚数および厚さ分布を求めた。

結果 3名の周径の異なる被験者について、着装によるダーツ、タック、ギャザーのしめる個所、その分量、面積の変化、また重ね枚数とその厚さを求めることができた。